麻布の丘に

広報誌
第2号
1999年10月16日
発行
麻布学園

〒 106-0046
東京都港区
元麻布2-3-29

Tel.03-3446-6541
Fax.03-3444-2337

沼津 江原素六記念公園落成

沼津市にあって、江原素六先生の銅像とともに親しまれてきた江原公園が国道一号線の拡張計画で移転を迫られることとなった。おりしも今年は、愛鷹山山麓地域が、江原先生その他先人たちの骨折りによって、地元の村々に払い下げられてちょうど百周年にあたり、愛鷹山御料地払下げ百周年記念事業の一環として新公園を設立することとなった。麻布学園が毎年江原先生の墓参りの際にお世話になっている江原素六先生顕彰会（青木由明会長）などが中心となって移転先を探した結果、元の公園より北へ七〇〇m、江原先生の墓所近く、はるか駿河湾を見渡せる小高い丘のうえにこの上ない土地が見つかった。（沼津市東熊堂字東本陣六一七―一。二〇〇〇平米）。新公園が、二一世紀村づくりの拠点となることを念願する地元の方々の献身的な努力があって、この地に江原先生の銅像を移築し、公園としての整備工事を施した結果、さる五月一九日、新公園の落成式が盛大に行われる運びとなった。当日は江原先生の記念日にあたり、麻布学園からは新中一（三百一名）が恒例の墓参をかねて式典に一部参加した。生憎の雨であったが、校長をはじめ、一同江原先生の遺徳を偲び、新公園の完成を祝った。（氷上）

祝辞　自ら学びつ…

校長　根岸隆尾

愛鷹山御料地払下げ百周年おめでとうございます。本日、この記念式典に参列させて戴き、顕彰会の皆様をはじめとする地元の方々の、江原素六先生への崇敬の念、なお益々厚いことに深い感銘を憶えるのであります。新しく開かれたこの「江原素六記念公園」に立ち、先生の立像を拝したとき、心が自ら澄んでいくのを感じます。晴れていれば愛鷹山を背に遥か眼下に駿河湾を一望するこの地は、土地高燥にして空気清良、必ずや先生の御心に適っていましょう。

先生は、駿河人として霊峰富士を讃え、「富士は、常に崇高雄美な姿を以て、接する人々の心に清い美しい崇厳な観念を起こさせ、人生に対して無限の良い感化を与えている。」と語っています。本日沼津に参り、創立者江原泰六先生の事跡に触れる私ども麻布中学新入生三百一名の生徒の心に必ずや、良い感化を与えるに違いありません。ここに改めて、この場をお借りして、例年私どもを暖かく迎え入れて下さる社団法人江原素六先生顕彰会の皆様、又明治資料館、少年自然の家、地元の方々に厚く御礼申し上げます。

昨今、少年の犯すさまざまな犯罪や、学校生活の中核をなす授業が成り立たないという「学級崩壊」の問題が、大きく取沙汰されています。そうした現実の中で、ともすれば教育の方途も見失いがちであります。しかし、旺盛な好奇心と鋭い感受性をもった青少年、とりわけ十二三歳から十七八歳の中高校生は、一方で時代と環境の影響をまともに受け、軽桃浮薄な現実に流され易い反面、絶えず物事の本質的なものを求め、真正なものを直観する力を備えています。なればこそ、私ども中等教育に携わる者にとって肝に銘ずべきことは、自らが学び続ける行為者となって、生徒と共にあることでありましょう。私は今、江原先生のこんな文章の一節を思い浮かべます。「学校教師が、生徒に講義をなさんとするにあたり、↙

↗真心をこめて準備すると準備せざるとによりて、生徒に与える感化に大なる差がある。（中略）旧幕のころ、佐藤一斎とて、博学強記を以て有名なる儒者があった。ある日のこと、夜十時頃帰宅するや、直ちに書斎に入り、端坐して読書をされた。

（三頁に続く）

全学年一斉に 学級定数減

来年度から43人7学級

麻布学園では、懸案であった一クラスの生徒数（学級定数）減を二〇〇〇年度から、中学・高校全学年で一斉に実施する。これにともない各学年とも七学級編成（一学級四二～四三人）となるため、普通教室の確保が課題となっていたが、夏休み中に合併教室・実験室・研究室などの配置換えや改修工事を終え、解決した。定数減よって学級での指導は当然の事ながらこれまでよりもきめ細かなものになるが、学校全体としてのきめ細かな指導をどう確保していくか、さらに議論が深められようとしている。なお、カリキュラムの変更は当面ない。

（山内）

麻布の芸術

麻布学園の芸術科の授業をのぞいてみる。「麻布の芸術？」「芸術の麻布でしょ」そんな自負が伝わってくるような明るく充実した授業風景

美術

生徒の作品を講評

シルクスクリーン制作

工芸

ペーパーナイフ制作指導中

モザイク画制作

書道

にこやかに採点

文字の歴史を説明

音楽

いい音を出すにはね

隷書道の心を説く

歌には気持ちをこめて

ずいぶんうまくなった

インタビュー 麻布 旬の人

二一世紀ノンフィクション大賞を受賞した鈴木洋史さん（昭和51年卒）

すずきひろしさん一九五七年生。一九七六（昭五一）年麻布高校卒。フリーライターを経てノンフィクション作家。一九九八年、野球監督王貞治とその父、王仕福の故郷への思いを追求した「百年目の帰郷」で二一世紀国際ノンフィクション大賞（小学館）受賞。一九九九年、小学館より出版。本に「天国と地獄ラモス瑠偉のサッカー戦記」文春文庫、など。本名、鈴木浩。

わが麻布学園の卒業生となると多士済々。その中で、とくに若々しく特異な活躍をしている今が旬の人・・・第一回はこのたび二一世紀国際ノンフィクション大賞を受賞した鈴木洋史さん。お話をうかがっていて繊細さの奥に剛直なチャレンジ精神を感じた。

きき手　齋藤十氷上

大賞おめでとうございます。王監督への興味はどのような点だったのですか。

長い間タブーだった国籍という観点から王監督の内面の葛藤に迫りたい、と思ったのです。

しかし王貞治自身は日本で生まれ育った典型的な二世ですね。主人公はむしろ中国から出てきた父親の仕福氏のように読めますが。

ええ、二人の王が主人公です。あるいは息子の王貞治は表層で、父親の仕福は深層、と言って良いのでしょう。この物語は息子の貞治が自らの深層に触れて故郷を回復する物語なんです。

それにしても取材の運に恵まれましたね。特に中国での。

ええ、我ながら運が良かったと思っています。マスコミはもちろんのこと、家族の誰もたずねたことがなく、父親の死後「どこにあるのかさえわからない」存在になっていた父親の故郷を探し当てられたのですから。沢木耕太郎と言う作家が「幸運に恵まれない取材からはノンフィクションの傑作は生まれない」と言っています。それまでの取材が意味を持つかどうか運一つ、というところがあるのです。

出来栄えのほどはご自分でいかがですか。

とにかく父親の故郷を発見できたことで過去の話に終わらず、多少なりとも歴史の中での人間の営みの不可思議さを描けたのではないかと思っています。歴史を背負った物語性のある作品が書けたかなと思っています。

ところでどのような学生時代だったのですか。

麻布にいたころは、詩人を夢見るような、人見知りする生徒でしたね。大学では演劇に熱中しました。就職はマスコミ関係すべてだめでした。内気だったものですから。（笑）それにしても麻布はいい学校だったと思います。お互い干渉しないで、いいところを伸ばす雰囲気がありましたね。

今後どのようなお仕事を？

私は「主張する」人というより「描く」人だと思っています。取材の中で語られなかった真実を想像して物語にしていく、そんな文学性のある作品を書いていきたいと思っています。

ご活躍を期待しています。

（一ページより）

講義の準備をなすのであった。塾生日く、先生はこれまで数百回講義をなされていても、尚準備が要りますかと、先生日く、教育は真剣勝負の如きものである。武士が真剣勝負をするに当たり、いかなる弱敵に向かうにも、刀の目針は湿さぬ訳にはいかぬ、と。」この佐藤一斎の教育姿勢、精神は、とりも直さず江原先生ご自身が、実践躬行、身を以てお示しになられた精神であり、生き方であります。そして、いかなる場合にも何事に対しても、一点の私心、私利私欲なく取り組み、「青年即ち未来」と信じ、終生「青年の友」として生きた先生のご生涯、ご人格を偲ぶとき、私ども教育に携わる者を導く一筋の光が見えてくるのであります。江原先生、願わくは、学園の行く末を見守り、本日墓前に参列する新中学一年生を正しくお導き下さい。

一九九九年五月一九日

麻布中学・高等学校校長　根岸隆尾

トピックス

フランス国民議会議長一行来校

九月十八日（土）午・後、フランス国民議会（下院）議長ロラン・ファビウス氏率いる十八名が来校し、本校の高校生を中心とする一三〇名以上が集まっている四階大会議室で、意見交換が行われた。一行の訪日はその三日前で、超過密なスケジュールの中、日本の高校生の意識と考えの一端を知る目的で本校を訪れた。討論形式を当初予定していたが、一時間という時間枠では、ままならず、本校生の提出する質問に、ファビウス氏が答えるという形になった。〈ナショナリズムと世界―そのゆくえ〉というテーマに沿って、生徒の質問は「仏国でのアルジェリア人労働者及びムスリムへの差別の問題」、「核保有国から見た日本の非核三原則をどう思うか」、「日本は国旗国歌法制化で議論が噴出したが、仏国歌ラ・マルセイエズは軍歌であることに疑問を感じないのか」、「青少年のいじめ問題や犯罪などはどうなっているのか」等々多彩かつ本質的なものであった。氏は丁寧にまたわかりやすく説明した。生徒たちは静粛で真摯であった。このような機会を仏国要人と共有できたことは、本校生の幸せと言うべきであり、仏大使館を初めとした仏国民議会の方々に深く感謝する次第である。一行はちょうど運動会実行委員会の生徒が販売していたTシャツを買い求めるなど、その親しみ深い人柄を垣間見せてくれた。

寧波中等専門学校との交流深まる

昨年八月、中国寧（ニンポー）波市から中等専門学校の一行が初めて来校し、国際交流の新たな波動を報告したが、その後、今年三月、我が校から高校二年生を中心に九名の生徒と三名の教員が寧波を訪れた。そしてこの八月十七日（火）再び寧波からの友を迎えたのである。訪問団は生徒十名、副校長以下通訳を含め六名、極暑の中、三時半過ぎに本校相模湖記念室に到着した。実はこの日、本校側の二〇数名は朝八時四〇分に参宮橋に集合したのであった。東京見物　これが本校国際交流委員会の先生方の発案で計画された午前中の歓迎の行事であった。訪問団一行の宿舎で合流し、浅草雷門へ、そして東京湾水上バスで浜松町まで小さな船旅を楽しんだ後、東京タワーに登り、東京の街を眺望し、その足で本校を訪ねたのである。ハードなスケジュールにも関わらず、皆元気一杯であった。根岸校長の、日中両国の互いの理解を深め、両校の絆を深めることの大切さ、更に互いにより視野を広げたい旨の挨拶の後、訪問団の副校長の挨拶、両校生徒代表の挨拶交換など、和気藹藹の雰囲気が盛り上がった。高三斉藤真弘君の司会と乾杯の音頭でジュースを飲み、談笑へと移った。

茅陽一氏母校で授業

六月三日（木）東京大学教授を経て現在慶応大学・大学院でシステム工学を専門として教鞭を採っている茅陽一氏（昭二八卒）が本校高校一年生を対象にシステム工学の授業を行った。

システム工学は、総合科学である、という主題を軸に高校生には馴染みの薄い学問の世界を、ＯＨＰ（オーヴァーヘッドプロジェクター）を使って、わかりやすく説明した。茅氏は母校で話すこと、高校生に向けて授業ができることに大いに期待し楽しみにして来校されたのだったが、一時間の授業の中では、生徒からの質問は少なく、茅氏は少々物足りなさを感じたことであろう。しかし、「エネルギー環境問題」が「システム工学」と密接に関係していることを幾つかの例を掲げて、懇切に解説し終わり、茅氏は、最後に「授業は先生と生徒との闘いだ」で結んだ。

文化祭そしてプール

五月三日から五日まで第五一回文化祭が盛大に催された。展示の内容も多彩で、中一から高三まで生徒達の授業中にはない朗（あか）るい姿が校舎内を活発に往き来していた。学外者も多数来校し（延べ人数一万八千人）、廊下も展示教室も混雑を極めた。

今年、例年の文化祭と大きく変わった事柄が一つ―特記すべき点としてあった。それは最終日の後夜祭の後の「プール」の件である。昨年まで常に教員側の頭を悩ませてきたのが、文化祭実行委員を中心とした「プール飛び込み」のフィナーレであった。これには危険が伴う。年間行事の中で最大のイヴェントである文化祭を成功させるための生徒達の長期に亘る真剣な努力は想像に余りあり、最終日の「プール」をもって、文化祭の終わりを飾りたいという気持ちが痛い程理解できるからであった。

今年、文実委員長の古澤祐介君らが中心となり、度重なる生徒同士の話し合いの結果として「プール飛び込み」が取り止めとなった。この結果と経緯は、四月二十七日付で、「プールに関する会議の詳細」として古澤君の名で全校生徒に配布された。そこからは、話し合いの過程で生徒達が悩み迷い逡巡している様子が顕わにされ、「麻布」の将来に向けて深く考えていることまでも読みとれる。「フィナーレを飾るのはプール飛び込みだけではない」との全会一致の結論の末、プールに代わる「文実委員全員の胴上げをする」ことで三日間の幕を閉じることに決まったのであった。（廣瀬）

学園事務室から

学園施設 最近の改善状況

暫く前まで、学校というものは「校舎が薄暗くて独特の雰囲気を持っている」というのが世間相場になっていました。麻布学園もご他聞に漏れず、どの建物も全体的に暗い感じで、更に、「教室や構内がきたない」というような芳しくない評判までありました。

ところが、最近では近代的な施設を有する学校が続々と現われ、我々としても何らかの対応をせざるを得ない事態を迎えました。このような状況を踏まえ、学園でも、創立一〇〇周年を一つの機会として、安全性については当然のことながら、利便性と快適性にも神経を使い、より良い教育環境の実現を目指してまいりました。

以下に、ここ数年間の工事実績をご紹介します。（なお、創立一〇〇周年記念館については、既にご紹介しておりますので、今回は省略させていただきました）

［安全面］
・耐震補強工事
　管理棟・特別教室棟補強実施
　理科棟・講堂補強実掩・理科棟非常階段改修

［教育環境面］
・体育館改修
・多目的体育施設新設
・運動場改修
・同スプリンクラー設置
・全ての教室に冷暖房設備設置
・化学実験室改修
・中庭（全天候コート）改修
・コンピュータ教室新設
・多摩川グランド（野球場）改修

［その他］
・女性用手洗所の拡充
　管理棟一階・講堂地下の女性用手洗所を全面改修
　体育館前・教室棟一階を部分改修
・PTA室新設
・教員喫煙室新設　（大山）

昔は農園だった、多摩川グランド全景

拾得物の行方

一般社会と同じように、学校の中でも色々な落とし物があります。昨年の例では、ベスト5は①財布・定期入れ②鍵③時計④筆箱⑤眼鏡の順になっていますが、中には、シャツや運動靴も結構あります。また、最近では携帯電話やCD・MD等も出てきました。さすがに財布・定期入れ・眼鏡の場合には比較的早く落とし主が現われますが、落とし主の手元に戻るものは全体の約四割というところで、世の中がそれだけ豊かになったということでしょうか。

これらの拾得物は学園が保管しますが、落とし主が現われない場合には、ある一定期間が経過後、学園の所定の手続きに従い処分しています。時計などは、有効活用するため、社会事業団体に寄付しています。主に、森林破壊が進む発展途上国への植林活動を進めている財団法人へのバザー提供品としての寄付です。金額的には僅かと思われますが、ここ数年間このような活動を行ってきた結果、援助を受けた国の子供達からお礼の絵葉書が届いたこともあります。このような時には、拾得物が新しい命を得たようで、心温まる思いがします。写真左（関）

自動販売機が充実しました

昨年4月から、管理棟の地下に清涼飲料水の自動販売機を設置しましたが、生徒に大人気で、昨年一年間で合計六万五千本も売れました。

学園には、従来、紙パック入りの牛乳を中心とする自動販売機コーナーがありましたが、時代の流れで、校外の自動販売機で購入する生徒が増え、学園としても頭を痛めていました。（学園近辺には、明らかに麻布生を目当てにしたと思われる自動販売機が増えてきました。）生徒の要望も勘案しながら慎重に検討の結果、思い切って学園内に自動販売機コーナーを作った経緯があります。

内容的にはミネラルウォーター・スポーツドリンク・お茶を中心に揃え、健康上問題と思われる炭酸飲料類は一切入れていませんが夏場には特にペットボトル入りの飲み物に人気があります。

価格が市価よりも安いこともあり、生徒が休み時間に飲み物を買いに校外に出ることも少なくなったようです。

ご存知のとおり、最近では、ゴミの分別やリサイクルが強く叫ばれていますが、学園でも生徒が校外の自動販売機で買ってきた飲み物の空き缶、ペットボトルの処理に悩まされていました。その間色々と工夫をしてきましたが、余り旨くいかずに困っていたところ、飲料メーカーの協力で空き缶・ペットボトルの回収が進み、一挙に問題が解決しました。（関）

文化祭異聞

文化祭はもちろん生徒主体の行事だから、教員はほとんど表面に出ない。その例外が、いまやメイン企画扱いされる「教師演芸会」で、すでに三〇年近い歴史がある。ところでここ数年、教員有志とＰＴＡ有志の企画・展示がちょっとした注目を浴びている。

（山内）

『私たちはチェルノブイリを知っているか』

教員有志の展示は、昨年の「パレスチナ写真展」（企画・山岡幹郎）についで二度目。チェルノブイリ原発事故から一三年。今でもその後遺症は続いている。そのような状況のなか、ＮＧＯ団体「チエルノブイリ子ども基金」から救援のためのチャリティー・コンサート開催の要請を受けて、教員有志（堀川禎一・増子寛・山岡幹郎）と文化祭実行委員会運営部門の共催という形で企画された。

フォト・ジャーナリスト広河隆一の写真を中心とする教室展示と、広河隆一のスライド・トーク、ナターシャ・グジー（一九歳・六歳の時、原発事故に遭う）の歌と踊りを中心とする講堂でのチャリティー・コンサート。

主催者の一人、山岡は語る。

「この企画にかかわったものとして、いま思うことは、ひとりの人をとおして事柄を知るということの大切さです。確かにさまざまな本や資料によって私たちはその事柄を知ることはできますし、その努力はずっとしなければならないはずです。しかし、生身の人、その人の声をとおして知らされる事柄の重さは、私たちのややもすれば乏しい想像力をいやおうなく突き動かすことがあります。……この企画に関わってくれた生徒諸君が、将来なんらかの形で、ナターシャにふれた今回の経験を活かしてくれることを願っています。」

なお、コンサート入場者は約五〇〇人。入場者、教職員、労働組合などから寄せられたカンパは総額約五〇万円だった。

『麻布発見』

ＰＴＡ有志による展示は四年目。内田前ＰＴＡ会長はその動機について次のように語る。「学内ではＰＴＡを含め、父母の自由な発言の場がない。普段タブーとなっていることでも、批判を恐れず自由に出せる場を作りたい。発言の場がなく、情報不足、あるいはウワサに流され不安になる父母たちのなかに風穴を開けたい。生徒たちに父母の考えを、互いにぶつかる覚悟で出してみたい。」

「麻布発見」というネーミングは、「お互いに異なる自由な意見を、本音でぶつけ合うことこそ各自にとっての発見であり、将来への可能性となるという意味」だとか。

テーマは、「親の言いたい放題」「親のこだわり」「麻布の尺度」と推移し、今年再び「親の言いたい放題」。麻布に対する辛口批評だったり、時には「麻布賛歌」になったりしながら、あやういところでバランスをとり続けようとしている。

麻布ＰＴＡは。発足当時の経緯から、役員の権力化を避けるために、毎年改選される。

しかしその理念が短所として現れる場合もある。継続性の問題だ。運営さえ間違わなければ、この「麻布発見」はその短所をおぎなう要素になる可能性をもっている。

廊下にまで展示された「麻布川柳」のユーモアにつられてか、入場者は幅広く、会場のノートには、親ばかりでなく、ＯＢ、在校生、小学生、他校の女生徒などの感想がたくさん書き記されていた。